

# 「新撰狂歌集」と「新旧狂歌誹諧聞書」と「古今夷曲集」と

島 田 肇 也

嘗て「古今夷曲集」を評して内容雑駁としたのは、菅竹浦氏著「近世狂歌史」<sup>註一</sup>であるが、氏の指摘通りその内容はいかにも散漫といった趣きではある。但しそれは狂歌を一つの見方、即ち天明調狂歌を見るような見方で眺めた場合にそのような感じを受取るのではないかととも考えられる。そしてその散漫という事も「古今夷曲集」の成立時点において考察してみるならば、一つの模索とも解釈し得る訳である。

以下拙稿ではそれ以前の狂歌を集成したかに思われる「古今夷曲集」が、いかなるところからそれらを収集したのかを、主に読人不知の歌について考察してみたいと思うのである。

## 第一章「新撰狂歌集」と「新旧狂歌誹諧聞書」の成立年代

「古今夷曲集」の成立を考える場合に、見逃してはならない作品として「新撰狂歌集」<sup>註二</sup>と「新旧狂歌誹諧聞書」<sup>註三</sup>の存在が知られる。単に「古今夷曲集」の成立を考究する上で重要なのではなく、近世狂歌の背景を更には狂歌史の問題を考察するにも資するところありと考えられるので、以下若干両作品の成立年代等検討してみたい。

従来「新撰狂歌集」は雄長老（慶長七年没）の撰の如く扱われてきたが、<sup>註四</sup>小高敏郎氏の指摘を俟つまでもなく大坂の役の折のらく書を含んでいるのであるからそれ以降でなければならない訳である。但し大坂の役以降元和か寛永かはたまたそれ以降なのかについては今少し考える余地があるように思われる。

ところで「国書総目録」の「新撰狂歌集」の項を見ると、版本として彰考館・天理蔵本を挙げその成立年代を寛永年間としている。恐らく菅竹浦氏の「狂歌書目集成」の記述<sup>註六</sup>に従ったものであろう。一方「新撰狂歌集」翻刻に付された解題<sup>註七</sup>によれば、水戸彰考館本は刊記を欠く由であり而してその成立時期を近世初期とされている。更に天理本<sup>註八</sup>を閲するに彰考館本と同様刊記を欠く。従って「新撰狂歌集」の成立時期を元和・寛永頃とおおまかに考えるのが一般的と言えよう。

さて、「新撰狂歌集」恋部に読人不知の歌として次の狂歌を見出す事が出来る。即ち、

あつまへ下りける人のよめる

(62) 大いそのとらかかたちをのこすなるいしを見るにもおもひ物



かな

というのがそれで、これは斎藤徳元著「関東下向道記」<sup>註九</sup>大磯の条の歌及び「塵塚誹諧集」<sup>註十</sup>下巻「虎石とて牛の子のふしたる大いさのう

つくしき石あり いにしへのとらがかたちをのこすなる石を見るに  
もおもひものかな」と同一のものである。前者には「寛永五年十二  
月廿六日」の識語があり、後者にも「寛永十年十二月日」の識語と  
共に「此上下巻、愚作誹諧之発句凡八百一十余句、同付合八百余句、  
狂歌二十首記焉。依貴命難辭奉<sup>三</sup>自染<sup>三</sup>禿毫<sup>二</sup>而已。」なる一文があ

ってその成立事情をも伺うことが出来る。即ち、徳元寛永五年十二  
月の関東下向の折の詠を寛永十年に貴人の命によりその初句「おほ  
いその」を「いにしへの」と推敲して差し出したものでもあろうか。

よって「新撰狂歌集」の成立も寛永五年十二月の時の詠を含むので  
あるから当然それ以降となる。下限については今一つ確実な証拠を  
見出し得ないのを憾みとするが、集中ふくはういん殿<sup>註十一</sup>・佐々木六角  
氏・三好長慶・足利義輝・土岐頼芸・武田勝頼・信長・後陽成院・  
秀吉・幽斎・紹巴・雄長老・家康・秀頼等戦国時代から織豊期にか  
けて活躍した人物を見出し得る事、更に大坂の役の折のらく書を下  
限としてその時代のらく書を少なからず含んでいる事を考え合せる  
と（特にらく書は即時性を要求されるものである点）元和偃武を間  
に挿んで元和・寛永頃までとすることに妥当性が認められる。そし  
て第二点として「新撰狂歌集」恋部(60)の狂歌が「昨日は今日の物語」<sup>註十二</sup>  
寛永十三年刊九行整版本の上巻第八十一話と行文が全く一致する点  
に着目したい。今「昨日は今日の物語」の用例を示すと、

ある人、わづらひさんぐなりければ、醫師来り、一脈とりて、  
薬を與へ、いろいろの毒斷を書付けけるに、一儀の事は親類も

見る事ありとて、書付けざれば、苦しからずとて、慎まざるゆ  
へ、以のほか再發す。醫師来りて、「沙汰のかぎり」と叱りけ  
れば、

毒斷のうちならばこそ悪しからめそ、はなにかは苦しかるべき  
とある。元来九行整版本は八行整版本に上・下巻一話ずつ増補して  
成り立ったものであり、右の用例はその増補部分にあたる。増補さ  
れた理由はいかにも「昨日は今日の物語」に相応しい好色性にあつ  
たと察知出来る。

ところで「昨日は今日の物語」八行整版本と「新撰狂歌集」の関  
係を見てみると、上巻拾遺<sup>註十四</sup>21・下巻16・34・44がそれぞれ「新撰狂  
歌集」の(37)・(173)・(135)・(140)に一致する。しかし、詞書・行文に相違が  
認められるばかりでなく「昨日は今日の物語」上巻拾遺21・下巻16  
の狂歌作者幽斎が、「新撰狂歌集」ではその作者名が記されていな  
い。従って両書間には直接的な関係は認められず、小高氏も述べて  
おられるように①「昨日は今日の物語」九行整版本編者がたまたま  
「新撰狂歌集」を目賭して付加したか②両者別々に同一内容のもの  
を採録したのが結果として一致したかのいずれかということになる。  
「新撰狂歌集」の成立下限決定の為には①の方が好都合であること  
言を俟たぬが、当時のこのような話の流行を考えると②であった可  
能性もきわめて強いとみななければならない。しかし仮りに②であつ  
たとしても寛永十三年の時点で採録されている事と、前記の理由と  
で「新撰狂歌集」の成立時期を寛永五年十二月から寛永十三年頃ま  
で、一步譲つても寛永末年頃までの間と見做してほぼ誤りがないも  
のと思われる。

さて次に「新旧狂歌誹諧聞書」の方はどうであろうか。管見では



木村三四吾氏が「竹馬狂吟集」の校異本として本書を使用され、近世初期写本とされたのが唯一の言及であろう。最初に「新旧狂歌諷諧聞書」では読人不知であるが、実は長嘯子の作であることが判明した左記の歌を見ていただきたい。

かすミ十もんしといふたいを下されけれハ

大はらやをしほになひくよこかすミたつハすみやくけふりなりけり

霞十文字

大原や小塩の山のうすかすみたては炭やくけふり也けり（長嘯子「難題十首」）

いとまなミ夜田かるしつかむら雲のかゝるをりにや月を見るらん

田夫見月

いとまなミ夜田かる賤の手のもととくもるたひにや月を見るらん（「難題十首」）

なからへは家のけふりのまつたつるのたき、の身ハのこれとも

東山に住うかりけむ行方なくいで給ひし時

いける日の宿のけふりぞ先づたゆるつひのたき木の身はのこれども（「挙白集」）

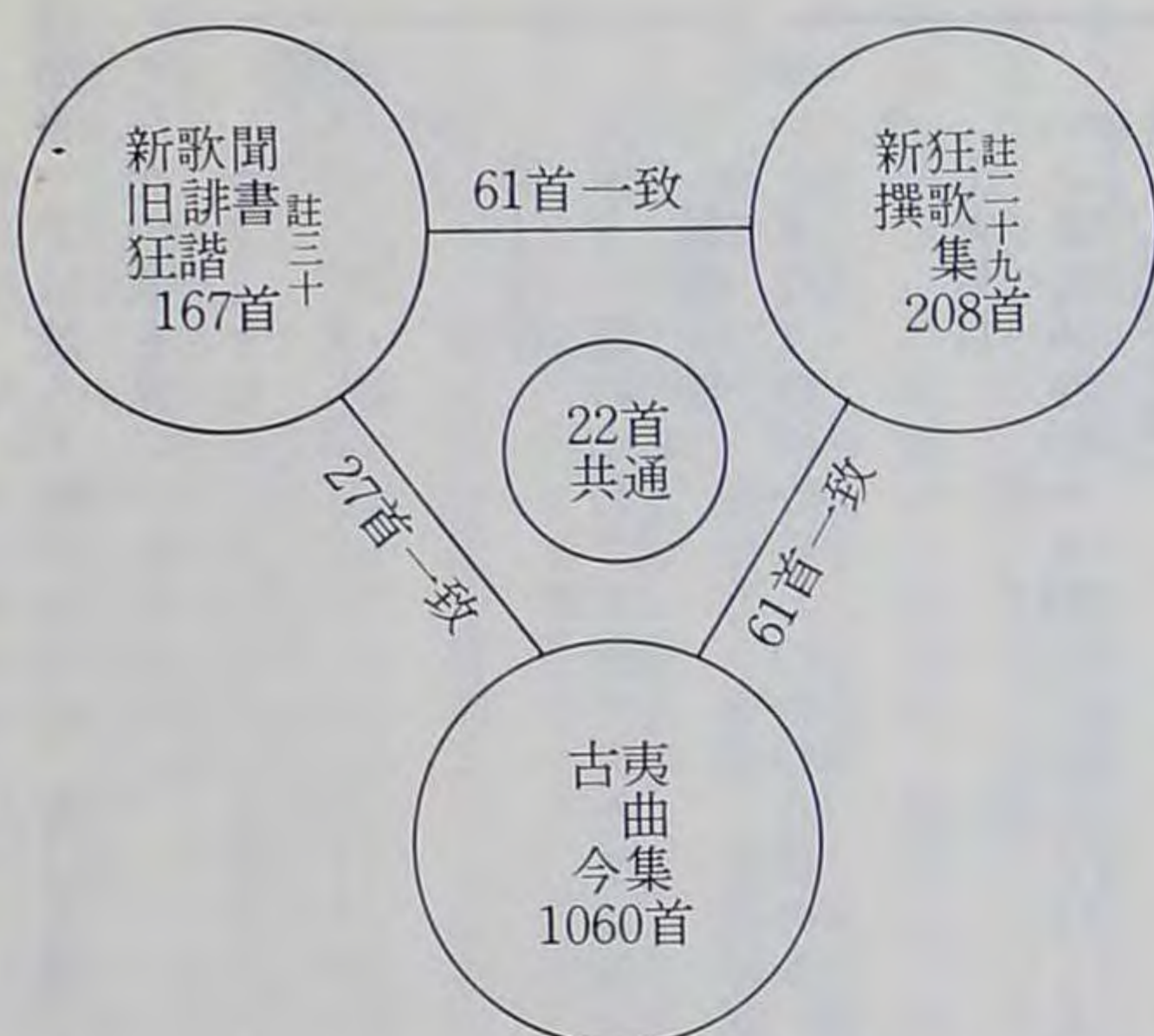
68はその内容から見て木下長嘯子洛西小塩山隠栖後のものであろうが、宇佐美喜三八氏によればその時期は寛永十七年春の頃であつたろうという。とすれば「新旧狂歌諷諧聞書」の書写された時期もそれ以降ということになる。更に詠作の作者及び年次を明らかにする事が出来たものとしては、以下のようなものがある。「(9)ちかくなり

とをくなるミのはまちとりしほのミちひのかたにこそなけ」は「多聞院日記」永禄十年十月二日の条に曉月の作として見え、「(21)あなきたなましりを出てゆく人のあしからくたりかゝるはこね路」は細川忠興天正十八年小田原陣の折の詠であるという。又「(89)八月十五夜月くもりけれハ 読人不知 世中ハかくこそあらめ物ことにこよひの月にかゝるむら雲」は沢庵「東海和歌集」に寛永元年八月十五夜の時の作としてあり、前記徳元寛永五年十二月の際の詠作が「新旧狂歌諷諧聞書」にも読人不知として見える。更に長嘯子作が明らかになった68番の歌は寛永十七年春と考えられる。次に諷諧の部に目を転じると、「わかむしやハこさくらおとし花うつほ」、「はるたつやにほんめてたきかとの松」、「あきなひかそらねもたかきほと、きす」はそれぞれ「塵塚諷諧集」によって寛永五年三月十二日・同六年正月元旦・同五年四月四日の徳元の句であることがわかる。さて「新撰狂歌集」の場合と同様に、その登場人物を調べてみると、幽斎を始めとして信長・三条殿・秀次・沢庵和尚・近衛信尹・秀頼・伊達政宗・藤堂高虎・京極松丸殿、更に秋田河内守の名を認めることが出来るが、これは「寛政重修諸家譜」に「安東太郎伊豆守河内守従五位下慶長三年山城國に生る。元和五年四月二日河内守に改む」と見える秋田俊季であろうと思われるし、又山なせんかうとあるのは秀吉のお伽衆の一人山名禪高のことであろう。以上徳川時代という新しい世になった時点から見れば、一昔前の人々が依然として世間の口の端に掛かるのは元和・寛永末年頃までと考えるのが適当と思われる。さすれば、「新旧狂歌諷諧聞書」の成立時期は寛永十七年から同末年頃までと推定したのである。



## 第二章「新撰狂歌集」と「新旧狂歌誹諧聞書」

先の章で不十分ながらも「新撰狂歌集」及び「新旧狂歌誹諧聞書」の成立時期を推定してみた所以は、それらと寛文年間成立の「古今夷曲集」との間に何らかの関連が有るのではないかとの推測に基づく。私の調査では「新撰狂歌集」と「古今夷曲集」両書で六十一首、「新旧狂歌誹諧聞書」「古今夷曲集」間では二十七首、そして「新撰狂歌集」と「新旧狂歌誹諧聞書」とでは六十一首の一致を見る。更に「新撰狂歌集」「新旧狂歌誹諧聞書」「古今夷曲集」三本間では二十二首の一致歌を見出す事が出来る。今それぞれの総歌数との対比において図示してみると、上のようになる。



ここで「新撰狂歌集」乃至「新旧狂歌誹諧聞書」と「古今夷曲集」との間に後者が前者をその典拠として使用したのか否かを検討する為に、左記の作者異同表を見ていただきたい。この表に拠る限り行風

が「古今夷曲集」を編むに際し、「新撰狂歌集」「新旧狂歌誹諧聞書」に依拠したのではないこと明瞭であろう。

新撰狂歌集	古今夷曲集
(6) 宇治の茶大臣の母	7 入安 註三十二
(8) あかかりをいたはりける人	47 雄長老 (或人曰猿丸大夫)
(104) 家なしのしそん	242 雄長老
(101) 家なししそん	280 読人しらす
(102) はなのしたのあか人	299 元理
(69) 有人	330 法印玄旨
(79) ある人	352 入安
(22) さけみつ朝臣	496 読人しらす
(34) 有ひんそう	508 法印玄旨
(33) うき世をいとふ僧	516 沢庵和尚
(78) 有人	600 法印玄旨
(85) まつしき人	618 中務丞基佐
(99) よみ人しらす	642 雄長老
(35) 雄長老	700 宗訊
(176) 幽斎	710 御前なる人
(140) 無記載	724 安継
(172) 松井といふ人	731 法印玄旨
(84) ひんやのやせひと	738 理西
(136) 楽書に	854 平信長 註三十三
(122) いつけう和尚	882 入安
(112) むしやう国師	1019 夢窓国師



(113) 新田左中将よしきた  
(114) 有人

1020 源尊氏  
1027 夢窓国師

新旧狂歌誹諧聞書

古今夷曲集

(132) 宇治の茶大臣母	7 入安
(133) あかりをいたはりける人	47 雄長老（或人日猿丸大夫）
(19) 旅人	330 法印玄旨
(11) たくわん和尚	495 読人しらす
(56) 西行法師	606 読人しらす
(82) 無記載	672 順阿
(61) 無記載	700 宗訊
(1) けんし	710 御前なる人
(54) 無記載	731 法印玄旨
(141) らく書に	854 平信長
(126) てんきやう大し	1016 或僧
(127) こうほう大し	1017 大師にや有けん香衣の僧

右の異同表で典拠の問題に限定すれば、十分であろうが、なお詞書や歌そのものにも異同あることを思えば、編者行風はこれらの歌を「新撰狂歌集」「新旧狂歌誹諧聞書」以外から採録したこと疑問の余地がない。ただどうして右にみられたように同一歌に対して多くの作者の異同があるのかという作者の問題は、当時の狂歌のあり方とも関連して興味ある問題であるが、ここでは深入りせず他日の問題として留保しておきたい。

次に「新撰狂歌集」と「新旧狂歌誹諧聞書」相互間の関連について検討してみる。まず同一歌と思われるものをその歌番号によって示すと以下の如くなる。上段が「新旧狂歌誹諧聞書」、下段が「新撰狂歌集」である。

(144)   (152)	(145)   (198)	(146)   (199)	(147)   (200)	(148)   (201)	(141)   (136)	(143)   (147)
(136)   (45)	(137)   (62)	(138)   (108)	(139)   (116)	(140)   (117)	(134)   (9)	(135)   (23)
(114)   (52)	(130)   (4)	(131)   (5)	(132)   (6)	(133)   (8)	(106)   (100)	(109)   (118)
(94)   (160)	(95)   (165)	(96)   (166)	(97)   (167)	(103)   (129)	(91)   (148)	(92)   (149)
(77)   (154)	(80)   (25)	(81)   (26)	(82)   (135)	(87)   (141)	(61)   (35)	(62)   (175)
(56)   (83)	(57)   (71)	(58)   (72)	(59)   (50)	(60)   (51)	(52)   (88)	(54)   (172)
(44)   (170)	(45)   (171)	(46)   (195)	(47)   (196)	(48)   (197)	(30)   (73)	(32)   (66)
(15)   (74)	(16)   (64)	(18)   (68)	(19)   (69)	(21)   (70)	(11)   (19)	(13)   (18)
(1)   (176)	(4)   (173)	(5)   (81)	(6)   (75)	(7)   (76)		

ところで近似した二者の関係として三通りのケースが想定出来る。即ち、(1)「新撰狂歌集」↓「新旧狂歌誹諧聞書」(2)「新旧狂歌誹諧聞書」↓「新撰狂歌集」(3)共通源泉の三つの場合である。(1)の場合であると刊本「新撰狂歌集」から「新旧狂歌誹諧聞書」の筆録者が書抜いたとするような場合が予想されようし、(2)のケースであれば「新撰狂歌集」の編者が「新旧狂歌誹諧聞書」に依拠したとする場合が推測出来、(3)になると「新撰狂歌集」の編者及び「新旧狂歌誹諧聞書」の筆録者が別々に集録したと見做す事が可能である。さて、これら一致歌は○印を施した部分即ち一字一句一致するものと、作者・詞書・字句の異同をもつそれら以外の部分とに二大別出来る。最初に(2)の可能性について検討してみたい。先に見た如く、私見によれば「新撰狂歌集」の成立時期に比して若干「新旧狂歌誹



「諧聞書」のほうが後と考えられ、(2)のケースの蓋然性は些少なのであるが、なお一致歌の大部分をしめる○印以外の存在のあることによってもこのことは証明される訳である。今その中から一例を示すと、

宗祇ありまのゆにいりけるに人々さひしさに哥あハせしてけり  
宗ぎともしらて法しも哥もミ給へといひけれハ  
津の国のありまの出ゆはくすりにてこしおれうたの数そあつま  
る (新旧狂歌誹諧聞書)

又ある時はんにや坊ありまの湯にて人のうたよむを聞て  
津の国のありまの出湯はくすりにてこしおれうたの数そあつま  
る (新撰狂歌集)

とある。ここでは歌そのものにはその第二句を除外すれば異同はない。ところではんにや坊なる人物は、「醒睡笑」の記述に随うならば<sup>註三十四</sup>宗祇・西行等と同じく狂歌に名を得たる人物ということになるのであるが、宗祇をはんにや坊に訂正するほどの根拠があると思えずやはりその依拠したところの相違と見做すべきではないかと思われる。従って(2)のケースはなかったと見てよい。

それでは残るは(1)(3)のケースと相成る訳であるが、ここで注目すべきは(130)以下の部分であろう。次に見る如く(130)の詞書を除外すれば、「新旧狂歌誹諧聞書」の方に若干書き洩し等ありはするものの、残余は全くの同文であり○印部分と同等に扱うべきものと考ええる。

とすれば、「新旧狂歌誹諧聞書」はその後半部に同文の一群をもつことになる。しかも相互の排列においてもその前半部とは明らかに違つて両者同一方向を指示している。これらの点から二つの推測を導くこととなる。一つは(1)の場合で「新旧狂歌誹諧聞書」の筆録者

	(130)	(134)	(137)	(138)	(141)
新旧狂歌誹諧聞書	人。の。か。た。よ。り。た。ん。ほ。を。お。く。ら。れ。け。れ。ハ。よ。ミ。て。つ。か。ハ。し。け。る	柳。さ。く。ら。か。さ。し。て。行。け。る。を。……	あ。つ。ま。へ。下。り。け。る。時。よ。め。る。よ。ミ。人。し。ら。す	…洛中のきせんさけさかなもたせて……	甲斐……
	(4)	(9)	(62)	(108)	(136)
新撰狂歌集	あ。る。人。た。ん。ほ。を。人。の。も。と。へ。を。く。り。け。れ。は。よ。み。て。つ。か。は。し。け。る	む。く。つ。け。な。る。法。師。の。色。こ。と。な。る。柳。さ。く。ら。か。さ。し。て。……	あ。つ。ま。へ。下。り。け。る。人。の。よ。め。る	…洛中の貴賤さけさかなをもたせ……	む。か。し。甲。斐。……

(圈点筆者)

が歌番号(130)直前まで数種の書物乃至伝達者に従つて書留めを行ない、「新撰狂歌集」を入手したことにより更にその興味の趣くままに書抜きを行なったとする推測であり、他方は(3)のケースで「新旧狂歌誹諧聞書」「新撰狂歌集」共に○印部分を共通源泉から抄出したとする。後者の場合「新旧狂歌誹諧聞書」の排列で(129)番と一線を画し(130)番は春の部立から始まつており、「新撰狂歌集」におけるそれら一致歌の部立配置を勘案すれば、部立順の成書を予想する事も可能である。

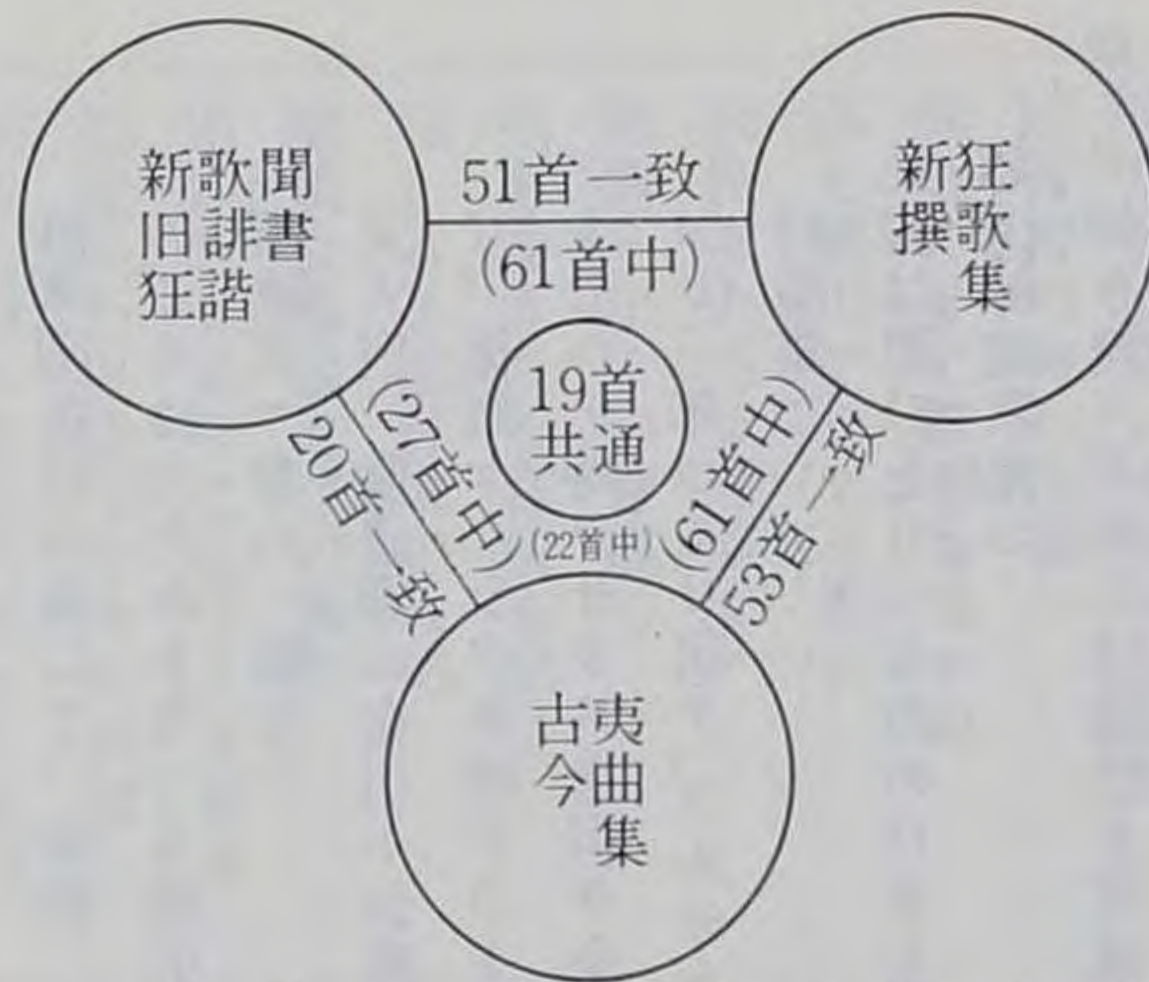
さて右の推測があたつていゝとすれば、招来される結果は以下の



ようなものであろう。(1)の場合「新旧狂歌誹諧聞書」は「新撰狂歌集」より後の成立という当然すぎる帰結となり、更に「狂歌集」からの書抜きという一つの事実が指摘出来よう。又(3)の関係であれば狂歌撰集の権輿とされる「新撰狂歌集」にも一つの基づく資料があったということになるだろう。そしていずれの場合にも相似た狂歌集が書写という行為を介在させて並存し得たという例証を見出すことが出来ると思われる。

### 第三章「古今夷曲集」と「前狂歌集」

第二章においては「新撰狂歌集」「新旧狂歌誹諧聞書」「古今夷曲集」三者の直接的関係の有無という点の考察を主とした為に、その



詞形を異にしながらも同一内容の狂歌の遍在という事実の検討を等閑りにする結果となった。翻って考えてみると、当時の狂歌の実態把握という面から見ればこれら狂ある歌どもの遍在ということは十二分に重視されなければならぬと考えられる。そしてその大多数は読人不知の詠であることを大きな特色とする。「新撰狂歌集」以下三者にみられた一致歌もその例外ではありえない。前記図1との対応においてその一致歌中の読人不知

を算出して図示すると、上のようになり、三者の共通項は読人不知の歌にあることが明らかとなる。もっとも読人不知といっても必ずしも単純ではない。少くとも三つの意味合いを認める事が出来るのではないかと考えている。その一は、文字通り名もなき作者の詠という常識的な意味でのそれである。その二は、先の長嘯子や沢庵更には徳元の歌にみられたように、本来の作者名が脱落して歌そのもののみ人口に膾炙された結果としてのそれであり、第三には「新撰狂歌集」に見える定家卿六歳の時の歌をその例とする言わば伝誦歌とでも言うべき性質のそれの三つの場合が考慮に入れらるべきである。

さて、「新撰狂歌集」や「新旧狂歌誹諧聞書」の基本的性格は右にみたような意味での読人不知の歌群を擁している点で顕著であり、これら読人不知の歌は空間的にも時間的にも以外な根強さでもって伝誦されてもいる。福田秀一氏「中世和歌史の研究」所引「越後在府日記」に見える「古今狂歌抄」中の「酒三十首」の一首「奈良酒や此手作のみそれ酒にもかくにもねをはしてのめ」が「新旧狂歌誹諧聞書」に「有人ならのもろはくをかいけるにかかりをねきれともまけさりければ ならさかやこのてつくりのミそれさけとにもかくにもねきられもせず」とあるのはその一例。なお「越後在府日記」は福田氏の説明を借りると「この日記（内容は諸書の抄出・書留）は、関ヶ原の役後、越後（又は加賀）に左遷された中原（堀）秀種なる者が、配所の徒然に諸書を抄出したもので、慶長九年十月の成立と認められる」とあって、慶長九年の時点での抄書本の存在は「新旧狂歌誹諧聞書」の先駆として注目し値するものと言える。更に一例を挙げると、「新旧狂歌誹諧聞書」にある読人不知の歌「津の国ぬ



のひきの滝を見てかくなん ひころへておもひをりつるぬのひきを  
けふたちそめて今もきてみる」を諸書では左記の如く記す。

摂津国布引の滝にて、宗祇。

このごろはたたみをりつる布引をけふ思ひたちみにきつるかな

〔醒睡笑〕卷八・頓作〕

又人曰。信濃國ニ布引ト云處アリ。山ノ形布ヲハリタル様ナ  
リ。後峯ケハシク水流テコトニ面目處ナリ。西行法師御詠ニ。

ミトセヘテ時々サラス布引ヲ今日立初テイツカキテミン

コレ三年コモリ居テ。フルサトコヒシトテ行トキ歌ナリ。〔月

刈藻集〕

此程は思ひをりつるぬのひきをけふたち初てみにきつる哉〔夢

窓国師道歌集〕<sup>註三十七</sup>

かくの如き読人不知の伝誦性を考慮に入れて、「新撰狂歌集」「新旧  
狂歌誹諧聞書」「古今夷曲集」の一致歌の大部分が読人不知であると  
いう点に立ち返ってみると、「古今夷曲集」が「新撰狂歌集」及び「新  
旧狂歌誹諧聞書」をその典拠としたか否かという点の考察だけでは  
不十分な事は明らかであろう。これら読人不知の狂ある歌どもを採  
録した作品はほかにも多く存在したであろうことが推測されるから  
である。そこで着目したいのは「古今夷曲集」巻末に位置する出所  
古書目録中の一書「前狂歌集」である。「前狂歌集卅四首」とは「古  
今夷曲集」以前の種々の狂歌集から卅四首ひろい集めたとも解し得  
るが、出所古書目録中の他の書物の例から類推して一つの作品集を  
指すと考えるのが妥当である。そしてこの「前狂歌集」とは「新撰  
狂歌集」ならざる、あるいは「新旧狂歌誹諧聞書」ならざる、而し  
て類似の作品ではあるまいかと考えるのである。その論拠としては、

なによりも「新撰狂歌集」「新旧狂歌誹諧聞書」「古今夷曲集」三者  
の一致が数量的な面にとどまらず、その性質において伝誦性の強い  
読人不知の歌が大部分であり、一連なりのものとしてみられること  
が指摘出来る。論より証拠で「新撰狂歌集」と「新旧狂歌誹諧聞書」  
との間にみられたように、書写という行為を通して類似の作品が並  
存し得たことから、丁度「新撰狂歌集」に対して相似た「新旧狂歌  
誹諧聞書」の存在し得た如くに「前狂歌集」なる作品が、同じ地下  
水を汲み上げていたのではあるまいかと推定したのである。第二  
に右の推定に立てば、「前狂歌集」卅四首を構成するものは当然前記  
の意味での読人不知ということになるであろうが、「古今夷曲集」中  
の読人不知(定家・西行・暁月坊・雄長老・幽斎・紹巴の詠を含む)  
を検討してみるに、典拠の明らかかなものを除外した残余を「新撰狂  
歌集」「新旧狂歌誹諧聞書」に見出す事が出来るという基準により  
選別すると、作者の相違を越えた広い範囲で四十九首、「新撰狂歌集」  
「新旧狂歌誹諧聞書」以外に所見のない狭い範囲で二十一首となり、  
卅四首とほぼ重なり合うをその根拠とする。古書出所目録でその典  
拠を明らかにし得たものは、読人不知八十八首中二十首即ち、「852扇  
をば海の水くづと」は「源平盛衰記」に、「922有漏地よりむろちに通  
ふ」<sup>1004</sup>経といふ其字に五時の「1037座禪する衾の下」三首は「法  
華直談鈔」<sup>註三十八</sup>に、又「839明暮の勤にすれど」<sup>877</sup>西方へ日々に通ふと  
「930下手の鞠今の禪宗の」は「竹斎双紙」に、そして「144などて角  
はやとしよりに」<sup>374</sup>思ひより身うちの皺の「453つらあかみくさげ  
にみゆる」<sup>454</sup>恥敷やなどあてことの「461よびし上は科なき時や」  
「490袖ぬれてあまのかりほす」<sup>631</sup>あぶなくのぼりはすべし」<sup>704</sup>  
今日や此僧の衣を」<sup>721</sup>あがり子の腕をおりべに」<sup>722</sup>あかり子のわ



んをおりべに」「723道すがらしどろもじずり」計十二首が「仁勢物語」に、最後に「741給はりし梅尾の茶は」が「京童双紙」にそれぞれ掲げており、雄長老の詠では集中三十三首中二十七首が「雄長老百首」に、幽斎は集中十五首中「300神はきねがならはしなれは」「358主従者たびにしあれば」「359いにしへは爰にいもじの」「549あはれにもいまた乳をのむ」「550さしいれてあらへる足の」「584域の名も断りなれや」「605脇指のしろをしとへは」の七首が「太閤記」<sup>註三十九</sup>卷第十「幽斎道之事」に依拠している。次に広い範囲の四十九首を列举する。

古今夷曲集	掲載本
47 あかがりも春は越路に	「新」「あ」「誹」
213 月見よといもか子ともの	「新」「醒」 <sup>註四十</sup> 「策伝和尚送答控」
242 貧報の神も出雲へ	「新」「醒」
280 酒のまず餅をもつかぬ	「新」
315 七瀬川やせたる馬に	「新」「聞」「醒」 <sup>註四十一</sup>
328 旅衣たちよる寺に	「新」「聞」
330 鞠子川くつ音高く	「新」「聞」「醒」
334 あなきたな江尻を出て	「新」「聞」「三斎様御筆狂哥」
338 しるき道行来の人の	「新」
340 焼立るはたこの飯の	「新」「聞」
341 かたせよりこしごえとをる	「新」
373 兒みむとさしてきたれば	「新」「醒」
482 たむほゝをとたんくとは	「新」「聞」
483 此程は打絶にける	「新」「聞」

495 我かさの身皮におほく	「新」「聞」
496 此酒は夏のかりねの	「新」「醒」
508 立よりてきけは鶉の	「新」「伊」 <sup>註四十二</sup>
513 引かつくかたびらごしに	「新」「醒」 <sup>註四十三</sup>
520 松茸のおゆるをかくす	「新」「昨」
524 花香ある人は御茶にも	「新」
525 残るこそ猶も別儀に	「新」
540 暁月がしはすのはての	「聞」「醒」「昨」
541 定家か力のほどを	「聞」「醒」「誹」「昨」
551 雨ふれば道はあしげに	「新」「醒」
557 天か下ひろくはるかの	「新」「遠」
600 塩ははやき程なれや	「新」「九」
606 頼みつる麦粉は風に	「新」「聞」「醒」
626 柴柱縄なともちと	「新」
627 御無心は百足の手ほと	「新」「醒」
633 午未さるとりいぬよ	「新」
642 虱ほと世をへつらはぬ	「新」「醒」
688 てむまでは及びもなきぞ	「新」「聞」
703 此弓はかへりたかれは	「新」「多」
708 御禮をちやくと申さん	「新」「醒」
710 つ、井つ、五つにわれし	「新」「聞」「醒」「多」他
712 呉竹のふしみにもなく	「新」「聞」「醒」「室」
731 こぬ人を松井がもとの	「新」「聞」「醒」
746 日本さへ及びなき身に	「新」「醒」



803 子どもをは鮎にする程  
805 などて角柎かたげと  
820 女院のお前のひろく  
821 費長鶴張博浮木  
830 かし米のくべき躰なり  
831 佗ぬれば身にかり米の  
849 大礮の虎がかたちを  
884 つみをきる彌陀の利剣は  
888 うかりける人ははつせの  
890 昨日まで袴のこしを  
916 大般若はらみ女の

新	新	新	新	新	新	新	新	新
竹			寒	聞		聞		
犬				閑				
				塵				

「新」―「新撰狂歌集」「あ」―「狂言」「あかり」「誹」―「穎原本」「誹諧連歌抄」「空紙」「醒」―「醒睡笑」「聞」―「新旧狂歌誹諧聞書」「伊」―「伊達政宗卿詩歌要釋」「昨」―「昨日は今日の物語」（八行整版本）「遠」―「遠近草」「九」―「幽齋」「九州道の記」「多」―「多聞院日記」「室」―「室町殿日記」「関」―「関東下向道記」「塵」―「塵塚誹諧集」「寒」―「寒川入道筆記」「竹」―「竹馬狂吟集」「犬」―「犬筑波集」

第三には本文の問題で、「新撰狂歌集」「新旧狂歌誹諧聞書」以外に所見のあるもの、例えば「遠近草」「醒睡笑」等と比較して「古今夷曲集」の本文は明らかに「新撰狂歌集」に近いという点にある。とりわけ「醒睡笑」は策伝の手が加えられたものかかなり違っており、歌の風にまで及んでいるものもあり、本文の視点から242・496・551等は他に所見あるものとしては「醒睡笑」のみであるから、先の二十一首に加算すべきかと思われる。ここでは「遠近草」との比較例を掲げる。

美濃國にありし衣下僧國守にそむきて所をのくとて

よみ人しらす

557 天か下ひろくはるかのゑげ笠をさしてみのには執心もなし

(古今夷曲集)

みの、**国**に去僧有けるか所のしゆごにそむき**国**をひらくとて

(144) 天下ひろくはるか  
のゑけかさをさして  
みのにはしうしんも  
なし

（新撰狂歌集）

（前文略）

日本には、かるほどの會下かさをもちてはみのはいらぬものか

な

(遠近草)

右三点を主たる理由として、「前狂歌集」を「新撰狂歌集」「新旧狂歌俳諧聞書」の延長線上に位置付けたい。もとより仮定の上に仮定を重ねるという論の進め方であり、隔靴搔痒不用意の譏を免れないところであるが、ここでは行風にとって最初の撰集である「古今夷曲集」には猶前時代の狂ある歌どもが、主として読人不知の詠としてまぎれ込んでいたという事実を指摘するにとどめたいと思う。

註一「近世狂歌史」(「日新書院」刊)一三五頁。

註二 「立教大学日本文学第二十九号」の活字翻刻の本文に拠る。以下同じ。

註三 近世文芸叢刊7「初期狂歌集」所収本文に拠る。以下同じ。

註四 狩野快庵氏「狂歌人名辞書」二四二頁・菅竹浦氏「狂歌書目集成」

一頁・同「近世狂歌史」七七頁・野崎左文氏「狂歌一夕話」二〇頁など。

註五 「近世初期文壇の研究」一一二頁。

註六「狂哥書目集成」一頁。



註七 註二の一四二頁。

註八 一冊本と二冊本を蔵す。それぞれ

902  
148

なるラベル貼付。

註九 秋山虔編「中世文学の研究」所収の森川昭氏による活字本に拠る。

註十 「古典俳文学大系」所収本文に拠る。以下同じ。

註十一 善広院足利義教か。

註十二 日本古典文学大系「江戸笑話集」所収本文に拠る。

註十三 学習院大学「文学部研究年報第十二輯」所収小高敏郎氏「昨日は今日の物語」の諸本「一三八頁及び主要諸本比較一覧表参照。

註十四 註十二に付された番号。以下同じ。

註十五 註十二補注八十二。

註十六 「ビブリアNo.43」六四頁。

註十七 註三に私に付した通し番号。以下同じ。

註十八 「長嘯子全集」第一卷三一四頁。なお同五三二頁も参照のこと。

註十九 「為愚癡物語」卷八には「さればふるきうたに、逆縁の月といふ題にて」とある。

註二十 「長嘯子全集」第一卷歌番号一四八五。

註二十一 「木下長嘯子の生涯」(「和歌史に関する研究」所収)一三七頁—三九頁。

註二十二 福田秀一氏「中世和歌史の研究」三五七頁参照。

註二十三 井上宗雄氏「中世歌壇史の研究室町後期」七七頁「三斎様御筆狂哥」参照。原本未見。

註二十四 「沢庵全集」卷三・七一頁。但しその詞形は少し相違があつて、「うき世とは誰もしれともいかなれは今宵の月にかゝる雨雲」とある。又同八九頁も参照のこと。

註二十五 註二十一に同じ。

註二十六 鈴木棠三氏「醒睡笑」(角川文庫)下巻一一八頁頓作第七話の註に随つて三条西実枝とするのが正しいと思われる。

註二十七 「新旧狂歌誹諧聞書」には単に近衛殿とあるが、「後撰夷曲集」に同

一狂歌の作者を近衛信輔即ち近衛信尹としているのに拠る。

註二十八 「戦国人名辞典」及び桑田忠親氏「大名とお伽衆」(増補新版)所収「御伽坊主山名禪高」参照。

註二十九 若干狂歌以外のものも混在。

註三十 註二十九に同じ。

註三十一 日本名著全集「狂文狂歌集」所収の本文に拠る。以下同じ。

註三十二 註三十一に私に付した通し番号。以下同じ。

註三十三 この歌は、出所古書目録中の「信長記」に拠つたと考えられるが、一応掲げる。

註三十四 「醒睡笑」卷之三文字知り顔第十三話に見える。なお「醒睡笑」の引用は角川文庫本に拠る。以下同じ。

註三十五 西行・雄長老・幽斎等の、それぞれの家集に見えない伝誦性の強い歌も含まれる。

註三十六 「中世和歌史の研究」三六二頁。

註三十七 「私家集大成中世」底本増補二首の内の一。同書八九九頁参照。

註三十八 「寛永乙亥孟秋吉日西村又左衛門新刊」なる刊記をもつ竜大本に拠る。

註三十九 桑田忠親校訂の活字本(新人物往来社刊)に拠る。

註四十 角川文庫補注に指摘あるものはそれに拠る。以下同じ。

註四十一 「古今夷曲集」とこれら三者とではかなりの違いが認められるが、一応掲げる。

註四十二 「伊達政宗卿詩歌要釋」(鈴木榮一郎・千坂庸夫著)に拠れば政宗の詠となる。

註四十三 註十二補注の指摘に拠る。

註四十四 西日本国語国文学翻刻双書の本文に拠る。